

目次

卷頭言 一

中世片仮名文における片仮名表記字音語について 榎木 久薫 五

龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について 佐々木 勇 七

——定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点——

鎌倉時代に於ける条件句構成のムニハについて 来田 隆 翌

——『延慶本平家物語』を資料として——

延慶本平家物語の接続詞 菅原 範夫 三

和化漢文における否定表現の一考察 田中 雅和 七

——用字・語法上の漢文和化について——

平安・鎌倉時代における「解文」の接続詞について(一) 西村 浩子 一〇三

実範の訓読 松本 光隆 二九

——東寺観智院蔵金剛頂蓮華部心念誦儀軌の訓読を中心に——

中世辞書類における助数詞について 三保 忠夫 一三九

「堅固」の意味・用法について 原 卓志 一六

延慶本平家物語の接続詞

菅原範夫

目次

はじめに

一、延慶本平家物語の接続詞概要

二、和文語と漢文訓読語の分布

おわりに

はじめに

山田孝雄博士は、平家物語の文章は「所謂和漢混淆文の上乗なるものとして人口に膾炙するものなるが、そのよく漢語を用ゐて国文に調和せしめたる技倆はわが文章史上に於ける偉観なり」と言われ、平家物語の文章を次のように分類された。⁽¹⁾

○主として五七調または対句であやなした「地の文」

○当時の談話語を描写した「詞」

○平曲家の所謂読み物、即ち当時の「往來の文」

○和歌、歌謡、朗詠等の「謡ひ物」

このうち、「詞」は当時の口頭語を含むこと、「往來の文」は漢文で書かれており、漢文訓読そのものであること、「謡ひ物」は和歌等韻文であること、などから和漢混淆文とは「地の文」の特性であると考えられるのである。

和漢混淆文についてのこのような考え方に対して、前田富祺氏は寛一本平家物語について、要所に漢語を使い、対句的な表現を繰り返して実際以上に漢文の影響が感じられる部分、七五調のきわめて流麗な和文体、促音便・擬態語・俗語を取り入れた生き生きとした文体等、その場面に応じて文体を変えており、「地の文」とも単純に一つの文体ということとはできないとされる。前田氏のこの考え方は「地の文」をトータルで見るとはならず、部分部分の調子を尊重しようという態度であると推測される。平家物語全体にこの考え方を導入すると、先の山田博士の四分類も更に小さく分類されうるということになる。

本稿は、延慶本平家物語において接続詞に着目し、その用いられ方から右の各種の文体がどのように関連しているのかを考察する。その結果から和漢混淆ということについても触れたいと考える。接続詞に着目するのは、接続詞が文章の枠組的な働きをするということ、また、和文語、漢文訓読語ともかなり明確に指摘できること、それによって和漢混淆文の性格の解明に役立つという築島裕博士の指摘によるものである。⁽³⁾

一、延慶本平家物語の接続詞概要

接続詞の認定については、副詞、感動詞との弁別やどこまで複合語を認めるか等、個々の用例においては揺れが生じるところである。本稿では『品詞別日本文法講座』第六巻の「接続詞および接続詞的語彙一覧」にならい、⁽⁴⁾接続詞的なものを含めて考えていきたい。従って、山田孝雄博士の『平家物語の語法』で扱っておられるものとは一致しない部分がある。